
ブイ系と共に

sh

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブイ系と共に

【ΖΖΠード】

N1802Q

【作者名】

sh

【あらすじ】

転生した少女リカがアニメポケットモンスターの世界を冒険する物語です。

第1話 出発前日

明日は私を含め5人のトレーナーがポケモンを貰い（私以外）、ここ『マサラタウン』を旅立つ。

私は元々マサラではなくタマムシの産まれで5歳のときここに引っ越してきたのだ。

その理由というのが、当時タマムシ大学でイーブイの研究をしていた両親に3歳の誕生日プレゼントにポケモンが欲しいとねだり、ちょうど産まれたばかりの卵を貰った。

3歳の子供がなぜポケモンを持つことを許したかと言つと私が転生者で精神が早熟しているからだろう。

転生に関しては、テンプレ的な内容なので省略するとして、貰った能力はくじ引きでヴィジョンアイ（制限なし）・念話能力・物質複製能力（触っているもののみ生き物不可）と微妙なものばかりだ。

だいぶ話がそれたが、普通一つの卵からは1匹しか生まれないので、私が貰った卵からは5匹の イーブイが産まれたのだ。

それだけなら、当時オーキド博士の助手をしていたウツギ博士を派遣してもらつて、タマムシ大学でも研究できたのだ。

もつとも、調べても何も解らず半年後ウツギ博士は帰つていった。

しかし、私が4歳になつたある休日の日に、両親の助手のエリカ姉さまに連れられて、エリカ姉さまの母（名前は知らない）がジムリーダーをしているタマムシジムに遊びに行つた。

そこで1匹のイーブイが置物の苔の生えた岩に触れ、リーフィアに進化してしまった。

カントーではリーフィアに進化出来ないはずが進化し、地域でレベルアップするのが進化条件なのに石で進化をしたためパニックになった。

何分謎の多い特殊なイーブイなのでもしかしたらと残りの4匹にも岩に触らせたが進化しなかった。

もしや、進化できない体质なのかと水の石・雷の石・炎の石を当ててみたら3匹とも進化した（1匹は石に触るのを拒否した）。

調査に行き詰つたとき、都合のいいことにちょうどオーキド博士の研究所にポケモン進化研究の第一人者のナナカマド博士が仕事でしばらく滞在すると聞き、リーフィアと私を引き離せないという理由からマサラタウンに引越しして、リーフィアとジムリーダーから買い取つた岩調べでもらうことになった。

結果からいふと、原因は岩の内部にあった。

岩の内部には苔のような物が入つた透明な結晶がいくつもあり、それを触つた父のイーブイも進化したことから、『苔の石』と名づけられた。

私のイーブイはどうやら岩の一部が欠けており、そこから覗き出た苔の石に触れてしまい進化したようだ。

予断だが、カントーの各地で苔の石が見つかりカントーに生息する

ポケモンにリーフィアが加えられるのはその数年後の出来事だった。

数年単位で行われると予想された研究が予想より圧倒的に早く終わったため、また引っ越すのかと思ったが何度も引っ越しのも大変だし大学の教授職も辞めてきましたため、母は専業主婦になり父はこのままオーキド研究所で働かせてもらうことになった。

それから5年イーブイたちを育てた。

ゲームと違いマサラ周辺でも色々なポケモンが出るため時間はかかったが経験値や努力値を十分稼ぐ事が出来た。

ポケモンも強化したし、自炊や旅に必要な知識も勉強した。

専らの悩みは…

「お姉さま～～～」

そう言って顔を赤らめ飛びついてくることいつだ。

私はこんな口調か性格の所為か（少なくとも外見ではないだろ）この手の女子に言い寄られることが多い。

特に過激なのがこのミハルだ。

名前や性癖だけでなく外見もバカテスの清水美春そっくりなのだ。

「ミハル離れ」

そう言いながら私はミハルの頭を押して引き剥がそうとする。

それでもしがみ付いたまま

「お姉さま、一緒に旅の準備しましょ」

「もうやった

そつそつけなく言つても

「じゃあ、ミハルの準備手伝ってください」

「明日から旅に出るんだから自分でしなき」

「いいじゃないですか、一緒に行動するのですし

そう、これなのだ。

女の子の一人旅は危険だと、私の両親とミハルの両親に言われ一緒に旅することになった。

いつのまゝが身の危険を感じるのは何でだろうか？

その後何だかんだあって結局手伝うことになつた。

「うごえればまだ名前を言つていなかつたな

「私の名前はリカだ」

「何がおっしゃつまして？」

「いや、なんでもない」

設定 第8話まで（ネタバレあり）（前書き）

ここに書かれている技はあくまで最新話時点での覚えている技です。

設定 第8話まで（ネタバレあり）

設定（ネタバレ注意）

主要登場人物

名前：リカ

性別：

年齢：転生前12歳 現在10歳

リカ手持ちポケモン

名前：シャワーズ

レベル：100

性別：

性格：ひかえめ

努力値：HP252 特攻252 防御6

特性：貯水

物理技：たいあたり・でんこうせつか・かみつく・とつておき・アイアンテール・あなをほる・たきのぼり・のしかかり

特殊技：なみのり・しおみず・シャドーボール・はかいこうせん・ふぶき・れいとうビーム・みずのはどう・ハイドロポンプ・オーロラビーム・みずでっぽう・じじえるかぜ・どろかけ・スピードスター

補助技：すなかけ・アクアリング・とける・ほえる・まもる・あまい・かげぶんしん・メロメロ・ねむる・こらえる・ねごと・あぐび

名前：ブースター

レベル：100

性別：

性格：おくびょう

努力値：素早さ252・攻撃128・特攻128

特性：もらひ火

物理技：ギガインパクト・あなをほる・アイアンテール・とつ

しん・ほのあのキバ・かみつく・でんこうせつか・のしかかり・か
いりき・いわくだき

特殊技・ひのこ・ほのおのうず・かえんほうしゃ・スマッグ・だい
もんじ・はかいこうせん・シャドーボール・オーバーヒート・ね
つふう・スピードスター

補助技・こらえる・あぐび・ほえる・まもる・にほんばれ・かげぶ
んしん・メロメロ・おにび・すなかけ

名 前・サンダース

レベル・100

性 別：

性 格・さみしがり

努力値・素早さ252・攻撃128・特攻128

特 性・蓄電

物理技・アイアンテール・あなをほる・でんこうせつか・かみつく・
にどげり・ミサイルぱり・かみなりのキバ・とつておき・ギガイン
パクト

特殊技・はかいこうせん・10まんボルト・かみなり・シャドーボ

ール・でんげきは・チャージビーム・でんきショック・ほうでん・シグナルビーム・スピードスター・のしかかり

補助技・じりえる・あぐび・ほえる・まもる・あまじい・かげぶん
しん・メロメロ・じりえる・でんじば・じつやくこどり・フリッシュ

名 前・リーフィア

レベル・100

性 別：

性 格・むじやき

努力値・素早252・攻252

特 性・リーフガード

物理技・リーフブレード・タネばくだん・タネマシンガン・シザーカロス・つばめがえし・でんこつせつか・はっぱカッター・かみつく・のしかかり・すてみタックル

特殊技・ギガドレイン・くわむすび・めぞめるパワー（炎）・シャード・ボール・マジカルリーフ・スピードスター

補助技・ふるいたてる・つるぎのまい・うそなき・くすぐる・あまえる・あぐび・にほんばれ・じつじうせい・くわふえ・メロメロ・

まもる

名 前：イーブイ

レベル：100

性 別：

性 格：さみしがり

努力値：攻252・素早252

特 性：てきおうじょく

物理技：たいあたり・でんこうせつか・かみつく・とつしん・とつ
ておき・アイアンテール・あなをほる・のしかかり・すてみタック
ル・ずつき

特殊技：シャドーボール

補助技：すなかけ・あまえる・こらえる・くすぐる・ねがい」と・
あぐび・みきり・まもる・メロメロ・かげぶんしん

名前：ミハル

性別：

年齢：10歳

容姿：バカテスの清水美春を幼くした感じ

ミハル手持ちポケモン

名前：ヒトカゲ

レベル：8

性別：

性格：すなお

努力値：特攻1・防御1

特性：もうか

物理技：ひつかく・メタルクローキー

特殊技：ひのこ

補助技：なきごえ

名 前：ヒトデマン

レベル：25

性 別：

性 格：ひかえめ

努力値：特防1・防御1

特 性：しぜんかいふく

物理技：たいあたり・こうそくスピニン

特殊技：みずでっぽう・バブルこうせん・スピードスター

補助技：

名前：一二ドラン

レベル：4

性別：

性格…ゆうかん

努力値：

特性…どくのトゲ

物理技…ひつかく・どくぱり

特殊技：

補助技…なきごえ

名前：マンキー

レベル：3

性別：

性格…やんちゃ

努力値：

特 性…やるき

物理技…ひっかく・からでチョップ

特殊技：

補助技…にらみつける

名 前：オニスズメ

レベル：5

性 別：

性 格：やんちゃ

努力値：

特 性…するどいめ

物理技…つつく・みだれづき

特殊技：

補助技…にらみつける・なきこえ

名前：イヴ

性別：

年齢：8歳

容姿：BLACK CATのイヴとポケスペのイーローを足して
2で割った感じ

イヴ手持ちポケモン

名前：ドードー

レベル：25

性別：

性 格・さみしがり

努力値：

特 性・にげあし

物理技・つつく・でんじうせつか・みだれづき・おいつち・だましうち

特殊技：

補助技・なきこえ・まもる・オウムがえし

名 前：ピカチュウ

レベル：27

性 別：

性 格・ひかえめ

努力値：

特 性・せいでんき

物理技・でんじうせつか・アイアンテール・かみなりパンチ

特殊技：でんきショック・10まんボルト・シグナルビーム

補助技：でんじは・しつぽをふる・かげぶんしん

準主要登場人物

名 前：シゲル

性 別：

年 齢：10歳

容 姿：アニメのまま

備 考：原作ライバルキャラ

シゲル手持ちポケモン

ゼニガメ

名前：シンジ

性別：

年齢：10歳

容姿：Fateの間桐慎一を幼くした感じ

備考：オリジナルキャラ

シンジ手持ちポケモン

フシギダネ

名前：サトシ

性別：

年齢：10歳

容姿：アニメのまま

備考：原作主人公キャラ

サトシ手持ちポケモン

ピカチュウ

名前：カスミ

性別：

年齢：10歳

容姿：アニメのまま

備考：原作ヒロインキャラ

カスミ手持ちポケモン

不明

この世界のルール

- ・バトンタッチ禁止
- ・眠つて30秒以内に何の行動も取らなかつた場合戦闘不能

- ・技はいくつ覚えさせてもいいが公式大会ではその内最大4つ技を選択しそれ以外を使ってはいけない
- ・ポケモンに道具を持たせてバトルをしてはいけない。
- ・技マシン及び秘伝マシンは存在せず、自力で覚えられる。
- ・レベルと覚える技に関連性は無い（例：レベル5のフシギダネがはっぱカッターは使えるがつるのむちは使えない）
- ・ここにはアニメの世界なのですばやさ＝回避力ではありませんが、多分に影響される（アニメでも攻撃を避けられると、周りが「あのかなりのスピードだ」みたいな表現をたまに見るので）
- ・図鑑にオリ機能あり

設定 第8話まで（ネタバレあり）（後書き）

水上 流霞様ご指摘ありがとうございます。

一部加筆しました。

指摘内容で加筆も修正もされていないものは、本編や過去話で出す予定ですのでご容赦を。

第2話 ミハル、お姉さまとの出会いと最初のポケモン

Side ミハル

私は図鑑とポケモンを貰つため、お姉さまと共にオーキド研究所に向かっていますわ。

私の選ぶポケモンは決まっています。

ヒトカゲ、このポケモンを選ぶのには理由があります。

あれはお姉さまと出会ったときのことです。

～～～回想～～～

昔の私は人と接するのが怖くて、性格が暗く同じ年頃の男子たちに苛められしていました。

そんなある日、亡くなつたお婆様の形見のペンダントを盗られて返してと泣きながら追いかけていましたが、石に躊躇走っていた私の体は宙に浮き木に頭から激突しました。

しかも運悪くその木にはスピアーの巣があり、怒ったスピアーが何十四も出てきました。

男子たちはペンダントを捨て一田散に逃げていき、倒れこんでいた

私はあつとこいつ間にスピアーに囲まれてしましました。

もつ駄田だと思つたとき

「ヤシト・かえんほりじや」

と語つのが後ろから聞こえ、私は何かに引つ張られスピアーの群れの外に来ていました。

セレジ見たのは純白の髪をした私と同じ年くらいの女の子でした。

この女の子の事は噂で知っています。

他の町では違うのですが、この辺一帯ではこの年でポケモンを持たせてもらえないでの、唯一持つているブイ系を連れた女の子の噂はとても有名です。

「ワーフィア、その子をお願い」

そう言つと後ろから

「フィア！」

と聞こえ、そこには最近カントーに生息するポケモンとして登録されたリーフィアが居ました。

「どうやら私を引っ張ったのはこの子のようですね。

この小さな体のビニに子供とはいえない人一人銜えてあのスピードで走るパワーがあるのでしょうか？

そしてその女の子はブースターとスピアの群れに向かっていき、

「ブースター！」

そう言つとまるで細かい指示を受けているかのようにブースターは駆けていき

「セット！ かえんほうしづ」

そういうとブースターは女の子が指差した所を正確に打ち抜いていきます。

リーフィアはこっちに飛んできた流れ弾をまもるで防いだり、スピードスターで打ち落としたりしてくれました

よく見ているとブースターは必ず視界のビニかトレーナーの女の子が入るよつに行動していました。

スピアも女の子の的確な指示に気付き、女の子も狙い始めました。

女の子は死角からの攻撃も避けブースターが撃墜し、背後から忍び寄ってきたスピアーにも攻撃の指示を出していました。

その光景は炎の中で舞つてゐるようで、とても幻想的でした。

私が惚けているといつの間にか戦闘が終わっていました。

~~~~~回想終了~~~~~

それから私は変わったと思います。

対人恐怖症は治りましたが大の男嫌いになりました。

例外はお父様とオーキド研究所の方々くらいでしきう。

特に嫌いのは、シゲル・サトシ・シンジの3人です。

シゲルは尊敬している祖父の研究を手伝つてゐるお姉さまに嫉妬して突つかかつてぐることがあります。

お姉さまに手を出すなど許しません。

サトシはお姉さまと家が隣なのをいいことに朝お姉さまに起こしてもらつたり、お姉さまの部屋によく出入りしたり、なんて羨まし……ゲフンゲフン……と、とにかく嫌いです。

シンジは昔私を苛めていたクソ野郎なので語るまでりません。

だいぶ話がそれましたが、あの幻想的な光景を見て以来最初に貰つ  
ポケモンはヒトカゲと決めているのです。

研究所に着くとシゲルとシンジが来ていました。

サトシ？知りません、お姉さまが何度も起こしても起きず結局ハナコ  
さんに遅刻するからと先に行くことになつたのですから。

「サトシが来ておらん様じやが、時間だから。

まずはこれがポケモン図鑑と予備のモンスター・ボールじや」

そう言つて私たちはポケモン図鑑とモンスター・ボールを受け取りま  
した。

「リカ君はいいんじやつたな、では3人とも最初のポケモンを選ぶ  
のじや」

そう言つて博士はボールからヒトカゲ・ゼニガメ・フシギダネを出  
した。

「僕はすでに決めている」

シゲルはそう言つてゼニガメのモンスター・ボールを手に取ります。

「フシギダネは3匹の中で一番成長が早いんだ」

そう言ってシンジはフシギダネのボールを手に取ります。

田当てのヒトカゲが手に入るから別にいいのですが、この二人にはレディーファーストというのを知らないのでしょうか？

私がヒトカゲをボールに戻そうとするときシンジが

「待ちたまえ、せつかくポケモンを貰つたんだボクがポケモンバトルというものを君に教えてあげよう」

「シンジにポケモンバトルを教えられるとは思えないが、リーカくん君とは一度戦つてみたかったんだ君とミーハルくん対僕とシンジのタッグバトルといこうじゃないか」

こうして私の初めてのバトルの火蓋が切つて落とされた。

Side out

## 第2話 ハル、お姫さまとの出会いと最初のポケモン（後書き）

初めてのバトルシーンなので情景をつましく書けていたでしょうか

### 第3話 ミハル、初バトルはタッグバトル

Side ミハル

5人でぞろぞろと庭に行き、私とお姉さま、シゲルとシンジの2組に分かれました。

それを見て博士が合図をかけます。

「これよりシゲル・シンジペア対リカ・ミハルペアのタッグバトルを始める! 試合開始!」

「行け! ゼニガメ」

「出て来いフシギダネ」

「頑張つて! ヒトカゲ」

「イーブイ! Set up」

そう言って私たちはポケモンを出しました。

「先手必勝！フシギダネはっぱカッター」

いきなりシンジのフシギダネがヒトカゲを攻撃してきました。

えつー？トレーナーとのバトルのときは先攻後攻決めてから始めるのがマナーではないのですか！？

博士もお姉さまも顔を少し顰めるだけで注意しませんでした。

ルールではなくマナーの違反だからでしょうか？

それよりも混乱して回避の指示が遅くなってしまい回避の指示が間に合いません。

「イーブイ、まもる

それをお姉さまのイーブイが割って入り、半透明の膜が攻撃を防いだ。

ほっとしているところの間にかヒトカゲの横にゼニガメが来ており、

「ゼニガメ、あわ

距離的に回避は間に合わないから相殺しあうと指示を出す

「えっと、ヒトカゲかえんほうしゃ」

ヒトカゲは「こっちを驚いたように振り返るだけで火を吐かずあわが当たつてしましました。

「その子、まだかえんほうしゃ覚えてないのではないか? 図鑑で覚えている技見れるから見てみる。」

いつの間にか近くに来ていたお姉さまがそう言いました。

もう倒し終わったのかとイーブイを見るとフシギダネにくすぐるをして無力していました。

シゲルは助けようとあわを放つもイーブイはフシギダネが盾になる位置に移動しくすぐるをし、接近戦を挑むもイーブイはみきりを使い避け、すぐさまくすぐるを再開するのでフシギダネのみが傷ついてしまうため攻めあぐねていました。

私は図鑑を開き技のデータを表示させました。

表示された技は、ひつかく・なきじえ・ひのこ・メタルクロ一の4つでした。

「それじゃあフシギダネのほうは任せた。」

## セツト・シャドーボール

「いつ言つといー、ブイはジャンプをして、お姉さまの指差したゼニガメに向かつてシャドウボールを放ち、ゼニガメを戦闘不能にしました。

無傷のゼニガメを一撃つでどれだけの威力があるのですか…？」あのシャドーボール。

それにしてもイーブイ、あの状況でもちゃんと見ていくんですね。

「ヒトカゲ、フシギダネにひのこ」

すでに満身創痍のフシギダネは一撃で戦闘不能になりました。

「勝負あり！ 勝者リカ・ミハルペア」

博士の宣言でようやく勝ったという事を認識しました。

私はほとんど何もしませんでしたが…まあ、勝ちは勝ちですよね。

私は嬉しさのあまり、ヒトカゲに抱きついてブンブン振り回しながら喜びました。

私がトリップしている間に、シンジがシゲルにあたり、怒ったシゲルとシンジが喧嘩したりしていました。

私が正気に戻つたのは、シンジが出て行きお姉さまに声をかけられてからです。

「そのヒトカゲ大丈夫か？」

お姉さまの一言で正気に戻り、抱きしめたヒトカゲを見ると、抱きしめたときは笑顔を浮かべていたヒトカゲは目を回していました。

私は慌てて地面に降りしました。

するとヒトカゲは千鳥足でフラフラと近くの木に片手をつき、グッタリしていました。

そんなヒトカゲに

「ヒトカゲ、大丈夫？」

と声をかけると、ヒトカゲは力無くコクリと頷きました。

心なしか尻尾の火も出会つた頃より小さくなつた気がします。

私たちはヒトカゲが「元気になつたら出発することにしました。

シゲルは先に行くそうです。

何度もお姉さまに起されたのによひやく起きた」の声の主をから  
かってから……

Side out

## 第4話 // ハル、初ゲットと翻宿り

S.i.d.e // ハル

「何で起きてくれなかつたんだよー。」

これが彼がお姉さまに向かつて発した第一声でした。

「お姉さまは何度も起きましたーそれでも起きなかつたのはあなたじゃないですかー！」

私が怒鳴るとサトシは少し怯みました。

その隙にお姉さまの手を掴み

「博士それでは行つてまこります」

「へ、ひむ…気を付けてな」

「い、行つてきます」

私に引っ張られながらお姉さまが博士に挨拶をして研究所を出ます。

外に出ると、町内会の人たちとお姉さまのファンクラブの子達が居ました。

お姉さまはファンクラブの存在を知つて解散するように言われましたが、解散してルール無用になるとお姉さまの迷惑になる事は目に見えていますしお互いが抜け駆けしないようにけん制の意味も兼ねてお姉さまには解散したといい、裏では残つていたりする非公式ファンクラブなのです。

余談ですが、町の女子の大半（大体7割くらい）が、といつても小さな町ですのでそんなに人数が多い訳ではないですが10代前半～後半がシゲルファンクラブ、10代前半以下はお姉さまのファンクラブに所属していたりします。

ちなみに会長は私です。

そんな訳で、私以外シゲルファンクラブのように着いていくことが出来ないため、皆恨みがましい目で見てきます。

着いて来れたとしてもお姉さまが拒否するでしょうが…

私でさえ女の子の一人旅をさせられないと私の両親とお姉さまの両親の両方から頼まれての了解なのですから。

私とお姉さまはファンの子達に囲まれ、応援と恨み言を貰いました。

恨み言は私だけですが…でもいいのです。

今日から私はお姉さまとずっと一緒に旅をするのですから、このくらい幸せ税です。

それから私とお姉さまは両親に別れの挨拶をしてマサラタウンを出発しました。

出発するとき、ちょうど研究所から出て来たサトシはピカチュウを連れていきました。

マサラタウンを出て、しばらく行くと大きめの川がありオレンジ色の髪をした同じ年ぐらいの女の子が釣りをしていました。

そのまま近くにある川沿いでは一番大きな木を集合ポイントにし、別れてこの辺を散策することになりました。

お姉さまは主にゲットのため、私はゲットヒトカゲのレベルアップのために

お姉さまと別れて、川沿いに森の中に入り少し進むと何か乾燥した星のような形をしたものがあります。

時折ピクピクと痙攣しているのであれはおそらくポケモンであるではなくいるが正しそうです。

図鑑を開くとヒトトマンと表示され解説が流れます。

私は無言で近づきポケットからモンスター ボールを取り出しヒトトマンに押し当てました。

ヒトトマンはボールに收まり、何の抵抗も無くゲット出来ました。

水ポケモンなので川に向かって出します。

ヒトデマンは川に沈み少しうると

元気になつて川から飛び出してくださいました。

図鑑の情報だとこの辺りでは出ないうがどうしてこんな所にいるのでしょうか？

後で聞いた話だとこの子は誰かが逃がしたポケモンだそうです。

その後も散策を続けていると、何度も虫ポケモンに遭遇しました。

私は、あの事件以来虫ポケモンはどちらも苦手で、手持ちにも入れるつもりは無いので虫ポケモンは見つけ次第倒しました。

その後なんとか二ドラン とマンキーをゲットできました。

これ以上はヒトカゲとヒトデマンが限界なので、今日の散策はここまでにして集合場所に向かいます。

集合場所に行くと、女の子は居なくなっていました。

しばらく待つていると、雨が降つてきました雷も鳴っていますし移動したほうがいいでしょうか？

それからじまじましてもお姉さまはやつてしまません。

私、置いていかれませんよね？

お姉さまは強制されて私と一緒に行くことになったのでとても不安です。

私が不安げにしていると、お姉さまが森の中から出てきました。

ああ、一瞬でもお姉さまを疑つた私をお許しください。

「?……どうしたんだ?」

「い、いえ、何でもないです」

「そうか?」

「グハツ」

お姉さまのワイヤーシャツが雨に濡れたせいで透けて、い、色っぽ…駄目です、これ以上直視したら理性が持ちません。

「本当に大丈夫か?顔も赤いし風邪でも引いたんじや…」

そう言って私の頭を両手で押さえ、おでこをくつ付けた。

「あう、あう…あう」

お姉さまのお顔がこんな近くに…

「熱は無いみたいだが…ん？どうした？そんな固まつて？」

「い、いいい、いえ！ただ大丈夫です！それよりもお姉さまこそ  
そんなびしょ濡れで風邪を引いてしまいます！早く乾かしてください！」

「ん？ そうだな、そつをせてもううつか」

そつ言つてお姉さまは脱ぎ始め…って

「おおお、お姉さま！こんな所で着替えないでください…誰かに見  
られたうううなさるのですか」

「ん？ 大丈夫だろ？ここには私たち以外誰も居ないし、居ても1  
0歳の下着姿なんて見ても欲情しない だろ？」

「そ、そそそ、そういう問題ではありません…お姉さまはもっと淑

女としての自覚を持つてくださいー!」

「大丈夫だつて…」

そ、そそそ、それにお姉さまのそんな姿なんて見たら、私の理性が持つ自身が……チラッ

「て、早っ！」

お姉さまはもつ着替え終わっていました。『。

「どうした？ そんな打ちひしがれて」

「お気になさりやない」

「そ、そつか、それはそつと集合時間までだいぶあるが濡れている様子はないし雨が降つてから来たわけ でもないしじうしたんだ？」

私がポケモンがこれ以上バトル出来そうになかったので早めに切り上げて来たことを話すと

「手持ちのポケモン全部ボールから出しなさい」

「は、はい」

言われた通りポケモンをボールから出すと、お姉さまは赤とオレンジの間のような色をした霧吹きのようなものを一つ、紫色の色違いの霧吹きのようなものを三つ出して赤いのをヒトデマンに紫のはヒトカゲ、マンキー、ソリードランに中身が無くなるまで吹きかけていきます。

吹きかけられた子達は元気になりました。

「何ですか？それ

「紫のが『キズぐすり』、オレンジっぽいのが『いいキズぐすり』だ」

「これが…始めて見ました」

「そうか、ミハルの両親はトレーナーじゃなかつたんだったな。

それなら馴染みがないのは当然か…、ならいくつかやるから持つてこるといい。

トレーナーの必需品だからな、私と一緒にいるときはいいが今日みたいに別行動のときに困るだろう」「

そう言つてお姉さんはバツグからキズぐすりといいキズぐすり10個ずつ、それから『なんでもなおし』というのも同じく10個それと『すじ』にキズぐすり』といつを5個貰いました。

こんなに貰つていいいのかと聞いてみますと

「いくらいもあるから気にしないでいいよ」

「あつがとうござります」

「いいよ…………いくらいでも複製できるし」

「お姉さま、何か仰いました?」

「いや、何も」

「そうですか…」

どうやら私の聞き間違いのようですね。

一際大きな雷の音が鳴ると雨が止みました。

近くに落ちたようですが、この辺は草が多いので火災とか大丈夫で

じゅうか？

「さて、雨も止んだし出発しようか。

今から行けば夜にはポケモンセンターに着くだろ？」

「わかりましたわ」

こいつして私たちはポケモンセンターに向かつて歩き出したのですが、途中に大量のオースズメが焦げて倒れていきました。

もしかしなくてもさつきの電、直撃ですか？

お姉さまと私は無言でボールを取り出し投げました。

ヒトデマンのときと同じく何の抵抗も無く捕まりました。

トキワシティに着き、ポケモンセンターに向かつて二つの間にか私たちを抜いて到着していたサトシと川で見た女の子が言い争っていました。

とこつか何ですか？その真っ黒に焦げた自転車モダキ



## 第5話 ハル、ロケット団との初戦闘（前書き）

この話では、原作とは異なる点が数ヶ所あります。

- ・ポケモンセンター内部構造
- ・図鑑のオリ機能
- ・時系列の変更
- ・オリ展開

## 第5話 ミハル、ロケット団との初戦闘

S.i.d.e ミハル

触らぬ神に祟りなし、あの怒りがこっちに向かないよつ氣付かない振りして受付に行きます。

ジョーイさんはポケモンの集中治療中らしく不在なので、無人受付にポケモン図鑑を差込、私とお姉さまの宿泊登録をします。

それから公衆電話の所に行き、オーキド博士に電話をします。

「おお、ミハル君にリカ君よひやくトキワシティについたか。

それにしてリカ君は初日だところにすいぶんと沢山ゲットしたのう。

元々手持ちが5体、じゃから2匹以上捕まえれば転送されてくることはわかつておつたから数体は来ると予測しておつた。

じゃが、ここまで大量に来ることは予想しておらなかつたわ。

しかし、ワシが渡したモンスターボールは5個だったはずじゃが  
?」

「出発前に両親から餞別として道具を色々貰いましたので…

それと、もう1体そちらに送りたいのですが

「了解した送りたいポケモンの入ったモンスター・ボールを転送装置にセットしてくれ」

「この言葉から察すると、オーキド博士が渡したモンスター・ボールよりも多く捕まえたって事ですよね？」

少なく見積もつて6匹以上

「参考までにお聞きしますがお姉さまはどれくらい捕まえたのですか」

「えっと、確かコラッタ・ラッタ・ポッポ・ピジョン・キタピー・トランセル・バタフリー・ビードル・コクーン・スピアー・カイロス・ストライク・ゴダック・ゴルダック・オニスズメ・ニドラン・ニドリーノ・ニドラン・ニドリーナ・前に偶然手に入れた月の石を戦闘不能になったニドリーノとニドリーナに当てて進化したところを捕まえたニドキングとニドクイン・アーボ・ズバット・マンキー・コイキング・ギャラドス・ナゾノクサ・クサイハナ・マダツボミ・ウツドン・昔引っ越してくる前に貰つたリーフの石を使ってニドキングとかと同じ方法で捕まえた

ウツボットとラフレシア・コンパン・モルフォン・ヤドン・クラブ・トサキント・アズマオウだからえへとの38匹ー」

元々持つているのも合わせて43匹ですか、図鑑4分の1以上埋まりましたね。

それはやつと、

「さつきも思ったのですが、そんなに沢山の荷物どうやって収納してこらんのですの?」

「それは……」

「それは?」

「禁則事項です……………ゴメン、滑った」

いいえ、クリティカルです。

「本當は、旅に出るときのためにお小遣いを貯めて買った最新型のリュックサックなの。

原理はわからないうち、こぐらでも収納できて重さも感じないや

つ

「「話をする（ましたわ／たのう）」」

「「…」」

ああ、涙田で赤くなつたお姉さま可愛らしきですわ。

もつと弄りたいですが、やつ過ぎて嫌われたくないませんの」「ここまでにしておまかしよ。」

「それはわざと、心をせめてこんなに沢山あの時間内に捕まえたんですの？」

「グスッ……ああ、こいつに引つ越してきてからはあの辺りでよく野生のポケモンを相手にバトルしてた んだ、ある程度強くなつたら自分のポケモン同士でバトルしたりしたけど、それでも同じ相手ばかりだと癖とかが出来ちゃつから、時たまあの辺に行つたりしてたんだ。

だからどのポケモンがおおよそどの辺に居るか、私もイーブイたちもわかつてゐるから全員出でてどの子がどの辺に居るポケモンを担当するか決め手放つたのよ。

例えば、ゴルダックを捕まえたときはシャワーズがとけるを使って、ゴルダックに見つからないように

急所の所まで移動して、バトルのときと違つて攻撃が来ると思わず緩んでいるところに急所に向かって思いつきアイアンテールを放つたりして、気絶したところを銜えて陸に引きずり上げてきたのをゲットしたり、ブースターが少し焦げ目のついたカイロスを銜えてきたのをゲットしたりとかかな?」

私は飼い猫が蜘蛛を仕留めて主人の下に褒めてオーラを出しながらやつて来るがごとく、ブースターが褒めてオーラを出しながら焦げたカイロスの足を銜えて引きずつて来る姿を幻視しました。

それから少しばかり談笑して、治療も終わったらしく受付に来るようにななウンスが流れたので博士に挨拶をして電話を切り、カウントターに向かいます。

「お待たせいたしました、ポケモンをお預かりします

私たちはモンスター・ボールをトレーに乗せ、ジョーイさんに渡します。

それから私たちは遅くなつた晩御飯を食べに食堂に向かいました。

晩御飯を食べ終わるとちょうどいいタイミングで回復終了のアナウンスが流れました。

受付にボールを取りに行くと、サトシたちはまだそこに居て機械を

つけて眠ったままのピカチュウの看病をしました。

「さつき緊急で治療してたのピカチュウだったのですわね」

「ピカチュウ大丈夫か？」

「リカ！ミハル！何でココに？」

「何でつてポケモンの治療とご飯と泊まる以外に何があるんですの」

「それで結局大丈夫なのか？」

「あ、うん、ジョーイさんがしばらく<sup>女</sup>静にしてれば良くなるって

「そうか、良かった」

「マサラタウンのリカさん・ミハルさん早くポケモンを引き取りに来てください」

「あー…すみません」

そつとつてボールに手を伸ばしたその時、3つのモンスター・ボールが天井の窓ガラスを割つて落ちてきました。

モンスター・ボールからはアーボ・ドガース・ラッタが飛び出し、ドガースがえんまくを繰り出した。

「ケホツケホツ、何なんですか？」

「何なんですか？」と聞かれたら

「何なんですか」と聞かれたら

「答えないのが普通だが」

「答えてあげるが世の情け」

「まあ、特別に答えてやるわ」「

「世界の破壊を防ぐため」

「地球の破壊を防ぐため」

「世界の平和を守るために」

「地球の平和を守るために」

「愛と眞実の悪を貫く」

「愛と誠実な悪を貫く」

「ラブリー チャーミーな敵役」

「キュートでお茶目な敵役」

「ムサシ」

「アヤナ」

「ジロウ」

「カブロウ」

「銀河を駆けるロケット団の2人には」

「宇宙を駆けるロケット団の2人には」

「ホワイトホール白い明日が待ってるぜ」

「シヨツキングピンク桃色の明日が待ってるぜ」

「ニヤ～ん！」

「ラッチュー」

突然現れた4人と一匹、それに従う3匹のポケモンがロケット団を名乗る。

「どっちかに統一しろ、ですわ。」

「それ以前に」に向いて言え、ですわ。

「何で味方同士で張り合ひながら名乗っているんですの？」

そつ、最初はこいつを向いて名乗りを上げていたのです。

ですが、一言名乗りを上げるたびに2人の男女（確かムサシとロジロウ）と3匹のポケモン（ニャース・アーボ・ドガース）のグループと2人の男女（確かヤマトとコサンジ）と1匹のポケモン（ラッタ）のグループが交互に前に出て名乗りを上げます。

名前を名乗る頃になるとこひらではなくお互いに向かって睨み合いかがり名乗つていました。

「何で味方同士で張り合にながら名乗つているんですの？」と聞かれたら答えた

「それはもういいですわ

「その口ケツト団つてのが、どつしたつてんだ」

「解りの悪い小僧だねえ

「聞かなきや解るはずがない

「我らの狙いはポケモン」

「オレのピカチュウに手を出すなー。」

「ピカチュウ？ 我らの狙いはそんじょそいの電気ねずみではない」

「どうひきつ底抜けに珍しいポケモンだけだ」

「まつて！ そんなポケモンこのセンターには居ないわ」

「それを判断するのは我々だ」

「どうあえずこのポケモンセンターを乗つ取つて、ここのいるポケモンを全て調べるぞ」

「行きなさいアーボ！」

「ドガース、お前もだ！」

やつぱりドガースが煙幕を出した。

サトシとジローイさんと女の方はピカチュウの台車を押して、カウンターの反対側の通路に向かい、私とお姉さまはロケット団が背後

にある扉から進入しないよつて扉の前に立ちます。

煙幕が晴れると、ヤマト・コサンジ・ラッタが残り、残りはサトシたちを追つて行つたよつです。

まあ、ピカチュウは戦闘不能でもここまで1匹もゲットしていなになんて無いでしょから、大丈夫でしょう。

ですから今はとりあえず

「ヤマトとコサンジでしたか？すみませんがここから先は一方通行お帰りはあちらです」

そつと出入口を指差しますが、帰る気はないよつです。

「「サブロウだーちゃんと名乗つただろーー。」

「どうでもいいですわ、頑張つてーヒトデマン」

「シャワーズ！ Set up！」

「行け！スリープ・ラッタ！」

「スリープー・メガトンパンチ！」

「ラッタはロケットずつきー。」

スリープはヒトデマン、「ラッタはシャワーズに向かっていきます。

「ヒトデマンー・避けでー。」

「シャワーズ、みずのはじりー。」

ヒトデマンは回避に成功し、「ラッタは避ける」とも出来ず、弾き飛ばされ戦闘不能になります。

「ヒトデマン、みずでつぽう！」

「スリープ、テレポート」

スリープの姿が消え、みずでつぽうは外れました。

そして、スリープがヒトデマンの背後に現れました。

「ヒートマン！」

「メガトンパンチ！」

ヒートマンは直撃を受け吹き飛ぶ。

「ヒートマン！」

私がそう叫ぶとヒートマンはなんとか立ち上がった。

「シャワーズ、みー」

「お姉さまーーー待つてくださいーーー」

私がそう叫ぶとお姉さまは攻撃を止めじっと向きます。

「今がそういう状況じゃないことも、私のわがままなのも解っています。

ですが、一人でやらせて下さる。

お願ひします！」

それを聞いたお姉さまは軽くため息をして

「シャワーズ」

セツ一言だけ齒きました。

それを聞いたシャワーズはお姉さまの足元に擦り寄つていきました。

「あいがとうござますー・ヒートマンスーパー・スターー」

「スリープ、テレポートそしてメガトンパンチ

「ヒートマンー!技を維持したまま仰向けに倒れてーそのままいつか  
くズボンー!」

「なつー!」

ヒートマンは星の巻きを巻き起します。

スリープはメガトンパンチを放つがそこにヒートマンはなく、星の巻に自分から突っ込んだ形となりました。

竜巻に巻き込まれ、スリープは上空に打ち上げられました。

そして、竜巻の回転で田を回したスリープはテレポートも吸血もとれず床に呑きつけられ戦闘不能になりました。

「オーリザー」

ヤマトがポケモンを出しつとしましたが

「 もうここのね？ はかこ」 うせん

お姉さまがそつまつとシャワーズがはかこ」 うせんを放ち、ヤマトとハサンジがポケモンセンターの外に吹き飛びました。

「やつましたわ~」

そつまつお姉さまに抱きつくも、すぐに剥がされてしまいました。

それとは対象にお姉さまの足にじやれ付くシャワーズが田に入りました

私はお姉さまに甘えるシャワーズと田が合いました。

その時、ゾクリと寒気がしました。

私にはポケモンの言葉はわからませんし、田線で会話も出来ません。

でもその時解つてしまつたのです。

シャワーブーズが『ににじょう』と『羨ましこだい』と叫つてゐるのを…

羨ましい、私は抱きつぶと剥がされるとこつのは…

「あの、お姉さま、…………いいですか？」

「ん? 何?」

「手を握りせてもらひてもよろこですか?」

そう言つとシャワーブーズに睨まれました。

シャワーブーズって確かにらみつかる覚えませんよね?

お姉さまは無言で手を出してくれました。

「あつがとひじれこまか」

私たちには手を繋いだまま、サトシたちが向かった方の通路に走つていきました。

走つてこるとドアの壊れた部屋が見えてきたのでそこにに入りました。  
その部屋にはジョーイさんと女の子がボールを機械に入れていました。

「サトシ、どうしました？」

「彼ならピカチュウを連れて向こうに行つたわよ」

その時、大きな爆発音がしました。

私たちは慌てて行くとサトシと元気になつたピカチュウが居ました。

無事なのはいいですがポケモンセンターがほぼ壊滅状態です。

幸いにも、宿泊施設と簡易回復装置が無事で良かつたです。

でも一言言つてもいいですか？

これの弁償、誰の支払いになるのですか？

夜明けまであまり時間がありませんが、私とお姉さまは泊まるところにしました。

サトシと女の子の子はもう出発するやうです。

そういえば、女の子の名前聞いて無かつたですね。

ベッドに入るとすぐに睡魔が襲ってきました。

なんだかんだって疲れは溜まっているやうです。

初めてのポケモン、初めてのバトル、初めての旅、初めてのゲット

色々あつた私の旅の1日は終わりを迎えました。

Side out

## 第6話 リカ&ミハル、初めてのジム戦とサカキの思惑

Side ミハル

私たちが起きるともう毎過ぎました。

寝た時間が寝た時間なので仕方ないのですが…

私とお姉さまはポケモンセンターを発ちトキワジムに向かいました。

「つて、何で今までジム戦なんですかー?」

「何でつてせつかくやつてるんだし… ポケモンリーグ出指している  
んでしょ?」

「確かに出指していますけど、やうでなくして、無理ですよ、トキ  
ワシティのジムはカントー最強なのですよー!?

今の私じゃ相手にもならないですよー?」

「ジムの前で誰か騒いでいると想えば、ずいぶん可愛らしこそ密様  
のようだな」

「ふへ？」

「私はトキワジムのジムリーダーを勤めているサカキという。

我がトキワジムに来たという事はジム戦に着たのかね？」

「いえ、その…」

「そうです。2人とも受けられますか？」

「ですから無理ですってー私たちバッヂ1つも持つてないんですよー！」

「クックック、そんなことなら気にしなくてもいい。

そもそもトレーナーは現在地から一番近い所にあるジムを回つていくのだ。

グレン島に住むトレーナーは1つ田のジムで挫折してしまつである。

だからどのジムでも持っているバッヂの数と旅の期間でジムリーダーは実力に上限を決めているのだ。

それは技術だつたり使用ポケモンだつたりいろいろとな。

ちなみにここはトキワジムでは使用ポケモンに制限がかけられている。

「ここが最強などといわれているのはただ単に私は会社を経営しておりあまりジムに滞在していないためほとんどのトレーナーはここを後回しにするのだ。」

そのためここに挑みに来る頃にはバッヂも7個以上がほとんどで旅の期間もそれなりに長い。

だから私の使用ポケモンの上限も上がり、最強のジムといわれるようになつたのだ。

だから気にせず挑戦してきたまえ

「バッヂはともかく旅の日数はどうやって知るんですか？自己宣誓？」

「いや、ポケモン図鑑を使つ。」

「ポケモン図鑑ですか？」

「ポケモン図鑑は身分証としても使われる。」

「それは何も名前と出身地だけがわかるだけではない。」

先にも言った旅の日数の他に、バッヂの数・勝率・戦術・手持ちのポケモンの履歴・トーポイントなど様々なことが解る。

それにジム戦は公式戦だバトルの前にポケモン1匹ずつ技を4つ登録しなければならない。

登録してある技以外の技を使ったかどうかの判断も行われる。」

「トーポイント?」

「トーポイントとはトレーナーポイントの略で、バトルをするごとに計算される。

ポイントは勝ったほうがあくまで貰えるが、負けても減らされることが無い。

このポイントはポケモンセンターをはじめ、全国のトーポイント対応店で現金の代わりとしても使用できる。」

「へへへ」

「だいぶ話がそれたな、それでバトルはするのかね?」

「やります!」

私たちはジムに入り技の登録とエントリーをします。

といつても私は技の選択をやるのはヒトデマンだけなのですが…

お姉さまは技の登録が大変そうです。

先にバトルをするのはエントリを先に済ました私のようです。

う~、緊張してきました。

「これより！ジムリーダーサカキ対チャレンジャー・マサラタウンのミハルのジム戦を開始します。

使用ポケモンは3体の総入れ替え戦です。

先攻はチャレンジャーから！試合！開始！

「頑張つて！ヒトカゲ」

「出で来い！イシツブテ」

「イシツブテ〜！」は岩タイプのジムなの？」

「いや、JJIJは地面タイプのジムだ。

先攻は君だ」

「ヒトカゲ、メタルクロー」

効果は抜群、効いているみたいですね。

「イシツブテ、たいあたり」

「ヒトカゲ、避けて！もう一度メタルクロー」

一回目のメタルクローがあたりイシツブテは戦闘不能になりました。

「イシツブテ、戦闘不能ヒトカゲの勝ち」

「やりましたわ」

まずは1勝ですわね。

「ヒトカゲ、戻りなさい。」

よくやりましたわ。

頑張つてオースズメ

地面タイプなら飛行タイプが有利

「出番だ、ティグダ」

「オースズメ、つつく攻撃」

「ティグダ、あなをほる」

オースズメが急降下してつつくをしようとしたがその前にティグダが地面にもぐつてかわされてしまいました。

そして上空に飛び上がるうとしたオースズメをティグダは地面から飛び出して吹き飛ばしました。

「オースズメー。」

「ティグダ、ひっかくで追撃」

「オースズメは吹き飛ばされて戦闘不能になつた。

「オースズメ、戦闘不能」テイグダの勝利」

「オースズメ、お疲れ様」

私はオースズメをボールに戻した。

「頑張つて、ヒトデマン」

「行つてこい、サンデ」

「ヒトデマン、みずでっぽい」

サンデは回避が間に合わず直撃した。

サンデはそれだけで戦闘不能になつた。

「サ、サンデ戦闘不能ヒトデマンの勝利、よつて2対1で勝者マサラタウンのミハル」

「おめでとう、これがグリーンバッヂだ。

それにしてかのヒトデマンレベルが飛びぬけているな。

ビード手に入れたんだい？」

「この子は昨日死に掛けていたのを拾ったのですわ。

お姉さまが言つにはこの子が居た周辺にヒトデマンは生息しない  
からだれかトレーナーが捨てたのではないかとの事です。」

「なるほど、酷い事をするトレーナーもいたものだ。

まあ、何にしてもおめでとう

「ありがとうございます」

Side out

Side リカ

ミハルの試合が終わって、次は私の番だ。

「よろしくお願ひします」

「これより！ジムリーダー サカキ対チャレンジャー マサラタウンの  
リカのジム戦を開始します。

使用ポケモンは3体の総入れ替え戦です。

先攻はチャレンジャーから！試合！開始！」

「リーフィア！ Set up

「行け、 サンド」

「リーフィア、 タネマシンガン」

リーフィアはサンドを一撃で戦闘不能にした。

「サンド戦闘不能リーフィアの勝利」

「そのリーフィアもよく育てられている。

その子も拾つたのかね？」

「いえ、この子はタマゴから育てたんです」

「ほう、しかしぬ次はどうかな?」

「シャワーズ！ Set up

「行け、カラカラ」

「さつきと使用ポケモンが違う」

「カラカラ、ホネブームラン」

「シャワーズ、かげぶんしん」

シャワーズのかげぶんしんでホネブームランは外れる。

「シャワーズみずでっぽう

「カラカラ戦闘不能リーフィアの勝利！よつて2勝先制したため勝者マサラタウンのリカ」

「おめでとう、これがグリ・ンバッヂだ」

「ありがとうございます」

「君たちはポケモンリーグセキユイ大会を目指すのだね？」

「はい」

「開催されるセキユイ高原に行くにまじてキラシティを通る」と  
になる。

ならバッヂを集め終わりセキユイ高原に行く前にここに来なさい。  
ジム戦用ではなく、私個人のポケモンでウォーミングアップをや  
つていくといい

「ありがとうございます。」

その時はよろしくお願ひします

その後私たちはジムリーダーのサカキさんに見送られ、トキワの森…………ではなく、ポケモンセンターに向かつた。

Side out

Side サカキ

2人を見送り、ジムに戻った私は笑いを堪える事が出来なかつた。

今日はなんて良い日だらう。

今日私はジム戦などやるつもりはなかつた。

その私が2人をジムに招き入れた目的は、リカといつ少女が持つ五つ子のイーブイを見るためだ。

5つタマゴを産んでの五つ子は普通だが、1つのタマゴから5匹生まれるのは異常だ。

それだけでも興味深いが、我等口ケット団にひとつでは違う意味も持つてゐる。

あのイーブイたちの片親は、昔我が口ケット団がミコウの遺伝子からミコウツーを生み出すために様々なポケモンにミコウの遺伝子を移植したが拒絶反応を出さず、奇形にもならなかつた数少ない例の1体だ。

その後イーブイはピカチュウを連れて研究所を脱走した。

そしてピカチュウは行方知れずとなり、イーブイはタマムシに住むイーブイ使いの夫婦に拾われた。

あの夫婦から取り返すために労力を消費するより、イーブイが成功すると解つたのだからまたやつたほうが建設的だ。

それでも監視は続けられた。

そして7年前、夫婦の娘があのイーブイのタマゴを貰つた。

そのタマゴから産まれたイーブイは先の理由のため世間から注目を浴びる事となり、監視もし辛くなつた。

それでもミコウの遺伝子がどのように影響しているか知るため監視を続ける事となつた。

そんなある日の事、その娘はタマムシジムによく預けられており、そこでジムのポケモンとバトルをいる。

それはいつもの事だが、監視をしていた団員は気になる事を発見した。

『生まれたてのイーブイはあそこまで強いだろ?』

イーブイのバトルの映像を解析したところ普通のイーブイより強いことがわかった。

それから他の成功体の子孫も同じになるか調べたところ成功体の子供はレベル以上の実力を出し、成長が早い事がわかった。

そのポケモンたちの事を『強化ポケモン』と名づけられ、ミュウツーと並行して研究される事となつた。

イーブイの奪取も会議に出たが、下つ端団員が本気のジムリーダーやあの夫婦を相手にして成功する確率など〇に等しい。

だからといって幹部クラスが出て万が一があつては困るため監視の継続ということで落ち着いた。

それもイーブイがリーフィアに進化したことでもうに難しくなり、彼女たちがタマムシから引っ越したときには監視すら断念された。

その少女が自分のジムの前に来たのだ。

会議で何度も話題に上がっているため、面影を残したその姿、そしてその年では珍しい純白の髪これだけ特徴が一致しているのだから、おそらく本人だろう。

本人かどうか名前の確認とイーブイたちがどこまで成長したか調べるのにジム戦はもつてこいだ。

もう一人の少女はジム戦を渋つており、一緒に旅しているようなので彼女が完全に拒めば、あの少女もジム戦をせずに行つてしまつで

あれついとは容易に想像できた。

だから私は、丁寧に対応した。

もつとも言った事は本当だがな。

2人をジムに連れ込み、ジム戦エントリーをさせた。

登録内容を見て、あの少女がリカ本人であることを再確認する。

それから、ミハルと名乗る、どうでもいいと思っていた少女とバトルを行つた。

だがここで良い意味で誤算があつた。

ミハルと名乗った少女が出したヒトデマンに覗覚えがあつた。

強化ポケモンの研究の際、性別のないポケモンも研究された。

子供を産めないため遺伝子を採取してクローニングしたところ、能力は上がつたが凶暴性が増し、言つことをまったく聞かないのだ。

ミュウツーすら押さえ込んだ制御装置を取り付けても効果はなかつた。

そのため、トキワの森やトキワ・マサラ間にある森に捨てたのだがまたこうして田の前に現れるとは思いもしなかつた。

それも、ちゃんとトレーナーの声といふとを聞いているのだ。

もつとも、トレーナーが未熟で本来の力が出せていないようではあるが

このトレーナーの能力なのか、何らかの条件を満たすと凶暴性をなくすのか…

『魔は魔を呼ぶ』という、もし前者なら彼女をロケット団に引き込むのもいいかもしない。

今は旅の途中、監視も付けやすいだろう。

ミハルとのバトルも終わって次は元々の本命リカとのバトルだ。

ジム戦では前のバトルで使用したポケモンの出す順番を変えることや使用ポケモンを変えることが認められている。

これは連戦や再戦のために作られたルールだ。

彼女はリーフィアを繰り出した。

同じポケモンを使っている似た容姿の同姓同名の可能性もある。

なのでせっかくより強いレベル20バッヂ2つクラスのサンダーを出した。

彼女なら楽勝、別人なら苦戦するだろう。

もし人違いだったのなら持つてくるモンスター・ボールを間違えたと謝罪すればいい。

結果、彼女はサンドを瞬殺した。

この強さなら同一人物だろう。

独特の指示の出し方も同じなのだし。

次に彼女が出したのはシャワーズ、パーティに同じポケモンを重複させるトレーナーはない。

ならこのシャワーズはリーフィアに進化少し後に進化させたシャワーズだらう。

彼女であると確証を得られた以上このシャワーズも相当強いはずだ。

なので私はカラカラを出した。

種族こそはバッヂは0～3個クラスのジム戦で使用するものだが、レベルはバッヂ4個クラスの強化。ポケモンでバッヂ7個クラスの強さを持っているのだ。

この勝負、カラカラに勝つても負けてもどちらでも良い。

カラカラに勝てばそれでよし、仮に負けてもある程度善戦できれば出すポケモンを間違えたと言つて『ジムリーダーが認めればバトルに勝利しなくともバッヂを渡すことを許可する』という協会のルールの下、バッヂを渡せばいいのだから。

結果からいふと、勝負はシャワーズの勝ちだった。

バッヂ8個以上クラスでもそこまでの圧勝は出来ない、おそらく

ジムリーダーの本気クラスはあるだろ？。

バッヂを渡し、再戦の約束をしてジムから出て行くのを見送った。

旅をして強くなれ、そして仲間を作れリカとミハルよ。

お前たちの持つ魔が、別の魔を持つ人間を引き付けるかもしない。

お前たちのポケモンが持つ『ミコウの遺伝子』とこいつ魔がミコウを初め他の伝説を引き付けるかもしない。

それらを引きつれ再び挑みに来い。

私はミユウツーをもって迎え撃と。

そして叩き潰し、我がロケット団の軍門に下してくれ。

すべては我がロケット団の未来のために…

私はジムに戻り、少し笑いをこぼしながらジム内部にあるロケット団基地に入る。

秘書がやってきて言つ労いの言葉を聴き、指示を出す。

「今出て行つた2人を監視するように指示を出せ」

「しかし、今居る団員は重要な案件を抱えている者ばかり、長期任務は今後に支障をきたすため無理かと」

「あこつらが居ただろう。」

技術研究部門に所属していれば今頃エリート団員になっていたのに何故か現場勤務をしているバカどもが

「ムサシ・ジジロウ・ニャース・ヤマト・サンジですか？」

「やうだ、そのムサシ・ジジロウ・ニャースにいひ

「ムサシ・ジジロウ・ニャースの珍しいポケモンを見つけたので捕まえたまで帰らなことひつて昨日から音信普通ですが」

このとき私は知らなかつた。

ムサシ・ジジロウ・ニャースが追つてこつたポケモンが、あの田イーブイと共に脱走したピカチュウの子供であるとは…

「なじみアーティ・サブロード」

「ヤマト・サンジはムサシとジジロウに負けない珍しいポケモンを手に入れてへるとひつひつ出て行きましたが」

「チツ使えんやつひだ……ん? ハサソジではなくハサブロウではなかつたか?」

「いえ、ハサンジと記憶していますが」

「やうか…ハサブロウではなくハサンジだったか…」

Side out

## 第7話 ハル、サムライ少年と新たな同行者（前書き）

アニメ4話のサムライって確かこんな感じでしたよね？

## 第7話 ハル、サムライ少年と新たな同行者

Side ≡ハル

ジム戦後、トキワシティのポケモンセンターにまた一晩泊まり、明け方トキワの森に向かつて出発しました。

トキワの森は虫ポケモンが多く生息していることで有名で、虫が苦手な私の懇願で「ココでは別れてすぐに突っ切ることになりました。

お姉さまの腕にしがみ付いたまま歩ける事に役得だと思つたのは内緒ですわ。

少し進むと虫取り網を背負い鎧兜を着込んだ短パンの男の子が出てきました。

奇抜すぎて普通に引きますわ。

「お前たちマサラタウンから来たトレーナーでござるのか?」

「や、そりですわ」

お姉さまも「クンと頷く。

「拙者の名はサムライと申す。

現在、マサラタウン出身のトレーナーに3戦0勝2敗1引き分け中のトレーナーでござる。

よつてお一方にもポケモンバトルを挑ませていただくでござる

こつして私とお姉さまは変体サムライとポケモンバトルをすることとなりました。

先に勝負するのは、お姉さまです。

「行くでござる、カイロス」

「ブースター！ Set up！」

「カイロスーはさむ攻撃い！」

「ブースター、ひの！」

ブースターは接近してきたカイロスを引き付けてひのいで一撃でした。

「カイロスへ！拙者の負けでござる。」

次は負けなじでござる。」

次は私の番ですわ。

「頑張つて！ヒトカゲ」

「行くでござる、トランセル」

虫と戦、私にとつて最悪の組み合せですわ。

それはそれとして

「かたくなるしか使えないトランセルで勝つ氣があるんですかー？」

「何を言つた！昨日戦つたマサラタウン出身のサトシといつ少年はトランセルで拙者のカイロスを破つたでござるよー。」

「うなみじやつせつて？」

「拙者のカイロスが彼のトランセルをはむでまつぱー…って敵

に教える分けなごで、『それぬ』

「まあ、いいですね。

私は早くこの森を抜けたいのです」

「それなうはじめるド、ジ、れのー。トランセルかたくなるド、ジ、れのー」

「ヒトカゲ、ひのい」

トランセルは焦げ田を付けて戦闘不能になりました。

「え、遠距離攻撃は卑怯で、ジ、れのー。男なりー。侍なりー。接近戦のガチ  
ン」「勝負で、ジ、れのー。」

「私は男でも侍でもあつませんわー。つて、何で私にだけ言づん  
ですかー？」

「拙者の負けで、ジ、れのー。」

拙者せ、「」でマカラタウン出身のトレーナーを待つとあるド、ジ、れ  
る」

「無視するなですわ！つてお姉さまも置いていかないでくださいで  
すわ！？」

私がツツ「//」を入れている間にお姉さんは先に行こうとしていましたわ。

私がお姉さまを追いかけようとしたその時、お姉さまの近くの茂みから小さな女の子とポケモンが飛び出しました。

Side out

Side ????

今まで私ももう8歳。

お父さんとお母さんが死んでもう3年になる。

2人はてんがいこじく？とかいう者らしく、私は誰にも引き取られることなくこの山小屋で暮らしている。

この山小屋は両親が別荘として所有していたもので、元々住んでいた家は両親が死んだ時、両親の友達を名乗るコイキング売りをしている男が現れてお葬式を変わりにやってくれた。

そのお葬式の費用を作るためだと、いつの家と土地を売ることになった。

お葬式はちゃんと行われましたが、遺産のほとんどを手数料とかで持つていかれてしました。

今思えば私は騙されたのでしょうね。

今の私にあるのはこの小さな山小屋と、匹のポケモン、ピカチュウとビーデードだけ。

遺産も底を尽きてから川で釣った魚を食べて生活をしている。

今日もお皿の魚を取ろうと釣竿をもって川へ向かっている途中、見知った鎧兜を見た。

おそらくまたマサラタウンのトレーナーに絡んでいるのだ。

私は茂みからじっとバトルを覗いた。

ちょうどブースターがカイロスを倒したところだ。

この辺りでブースターなんて珍しい。

彼が戦っているならマサラ出身のトレーナーなのに。

最初のポケモン居なかつたのかな？

たまに見かけるんだよね。

ポケモンを選ぶのが4番目以降のトレーナー、大抵ピカチュウかい  
ーブイを貰う。

貰つてすぐ進化させたのかな？進化条件石だし…

次の女の子はヒトカゲを出し、彼はトランセルを出した。

女の子も突っ込んでいるけどトランセルってバトルに勝つ氣あるの  
だらうか？

あ、負けた。

勝負はあつせりついた。

彼女たちも行くみたいだし、私も釣りをしに行こう。

そう思い振り向くと何かにぶつかって尻餅をついた。

そこには、ポリゴンが居ました。

何でこんなところに居るのか解りませんが、何やら敵意を向けでき  
ています。

ポリゴンはいきなりサイケこわせんを私に向かつて放つてきました。

突然の攻撃に対応できず私は吹き飛ばされ地面に打ち付けられます。

私は応戦しようとボールを手に取りますが開閉スイッチが壊れてしまい、ポケモンが出せなくなってしまいました。

ポリゴンはサイケこうせんを再び放ちますが、当たる前に体が持ち上がり攻撃が外れます。

私はお姉さまと呼ばれた人に抱えられていきました。

その人は腰にあるホルダーからボールを取りサンダースを出します。  
さつき見たのはブースターだつたと思うのですが…

「サンダース、にじぎり」

サンダースはポリゴンににじぎりを放ち、ポリゴンは戦闘不能になりました。

「助けていただきありがとうございます」

「怪我はない?」

そう言って私を地面に下ろします。

「はい、私は大丈夫なんですがボールが…」

そう言つてヒビの入つたモンスター・ボールを見せます。

その人はボールを手にとつて見ます。

「これはポケモンセンターで直してもらわないと駄目ね」

「そうですか……あ、お礼がしたいので家に来てください。

申し遅れました、私の名前はイヴと申します」

「私はリカ、こいつはミハルとサムラ…あれ? サムライは?」

「侍ならとつくに行つてしましましたわ」

「やつなの」

「彼とは面識がありますので大丈夫です…どうぞこちらに

そう言つて私は彼女たちを案内する。

家に着き、2人に座つて貰うとコップに水を入れて出す。

「すみません、水しかなくて」

「「えりつわお構いなぐ」」

「改めまして、先ほどは助けていただきありがとうございました」

「怪我が無くて良かつたよ。

といねでこの辺りでポリゴンが出るの?」

「出ません、とこづか最近のトキワの森は変なんです。

私はこの森に住んでもうすぐ3年になりますが、この一ヶ月森に居ないポケモンが出るんです。

メタモンやコイル、なかにはダンバルのよつたカントーに居ないポケモンまで…共通点は凶暴でいきなり人に襲い掛かって来ることです」

「いくら手持ちポケモンが居るとはいえ、何でそんな危ない森で1人で出ていたの?」

「えっと、夜飯の魚を取りに」

「『両親はどうしたの？』

「両親は3年前に亡くなりました。

親戚も居ません」

「『みんなさー』

「いえ、大丈夫です」

「それなら、一緒に来る？

トキワと二ビなら二ビのポケモンセンターが近いから、ボールの修理で二ビシティに行こう？」

ポケモンセンターで保護児童登録をすれば10歳未満でも旅に出れるし、国の補償も受けられるんだし…まあ私たちと一緒に行動しなくちゃいけなくなるけれど」

「良いんですね？」

「私が言ひ出したんだしいいわよ」

「私も構いませんわ。

お姉さまと2人旅でなくなるのは残念ですが、この子をこんな危険なところに置いておくよりよっぽどいいですわ」

「えと、ありがとうございます?」

それから私は旅支度をする。

持ち物は両親の写真とポケモン、下着にタオルに洗面具にお財布つと、それをリュックにつめる。

寝袋は町で買えるかな?あと衣服は…といつても食費の為に小さくなつた古着は売つて、そのお金で新しい服を古着店で買つているので1番綺麗な服もさつきのサイケで少しボロボロになつてしまつた。

町に行つたら古着屋に行こう。

古着をつめていると、2人に聞かれたのでそのまま答へると、何故か起こられ買つてくれるそうです。

何というか色々としてもうつて申し訳なく思います。

盗られる物はありませんが、しっかりと締りをします。

最後に鍵をかけて

「お父さん、お母さん、行つてやがれ」

Side out

## 第8話 イヴ、お姉ちゃんが出来ました。

Side イヴ

トキワの森を抜け、真っ先にポケモンセンターに向かつた。

そこでのジョーイさんが、トキワシティのジョーイさんとそつくりといつこども騒動あつたのは置いといて、2人のモンスター・ボールと一緒に私のボールを見てもうづ。

診断の結果、明日の朝には直るそうです。

ボールを預け、リカさんの『両親に電話をします。

そこで私のことを紹介され、今までの経緯を話すと養子に来ないかと言われました。

正直戸惑いました。

一人ぼっちでの生活はもう嫌ですが、両親以外の人を親と呼ぶのも抵抗があります。

私がその事を正直に話すと、今結論を出さなくて良いと、養子にならなくても良いし、なつたとしても『おじさん・おばさん』と呼んでもいいから、とりあえず旅をしながら考えてみるようこと言われました。

その後色々あって、最終的に養子になるかは考へることになり、何

故かり力さんをリカお姉ちゃんと呼びミハルさんをミハルお姉ちゃんと呼ぶことになりました。

その後オーキド博士に連絡を取りトキワの森の調査が行われることになりました。

電話を終えると2人はボールを受け取り、それから私たちは一ビジムに行きます。

明日行つジム戦の予約登録を行つためです。

登録をしているとバトルフィールドのほうから

「ピカチュウ！天井に向かつて10まんボルト！」

という声がした後、火災警報器が鳴りました。

火災場所はバトルフィールドのようですが、先ほどの電撃がスプリンクラーに当たったのでしょうか？

施設の破壊つて良いんですか？

職員の人もぜんぜん慌ててないので大丈夫なのでしょう。

ジムを後にして次に向かったのは洋品店です。

古着ばかり着ていた私は最近の服を知らないので2人に任せました。

それから数時間私は2人の着せ替え人形のようになに色々な服を着せられ、最終的には黒のワイシャツにワインレッドのネクタイとネクタインと同じ色のミニスカートを着ることになりました。

その後はポケモンセンターで旅に必要な寝袋や今使っている子供リュックではなくちゃんとした旅用のリュックを買つもらつた。

ちなみにお金はおばさんが転送してくれたらしいのでいつかお金を貯めて返したいと思います。

やるいじが終わるとそれ別行動です。

ミハルお姉ちゃんはおつきみ山方面でジム戦に向けてレベル上げ、リカお姉ちゃんはトキワの森の入り口近くの散策と捕獲に向かいます。

私はリカお姉ちゃんについていく事にしました。

トキワの森付近に行くとリカお姉ちゃんはモンスター・ボールを取り出し、シャワーズ・ブースター・サンダース・リーフィア・イーブイを出しました。

イーブイたちは何をするかわかつてている様に森に入つていきます。

ていうか何でこんなにブイ系で揃えているんですか！？

聞いてみるとリカお姉ちゃんはタマムシの生まれで、あの子達は3歳の誕生日に貰つたタマゴから産まれた五つ子なんだそうです。

3歳つて……私のドードーも5歳の誕生日に両親から貰つた最後

の誕生日プレゼントなんですねそれでも持つのが早いって言われたんですけど……

ちなみにピカチュウはトキワの森で傷ついて倒れているところを助けたんです。

そんな話をしているとイーブイたちが帰ってきました…… ポケモンを銜えて。

何でも凶暴化の調査のサンプルとしてオーキド研究所に送るのだそうです。

研究の結果によつてはトキワの森を立ち入り禁止になるかも知れないそうです。

あそこには私しか住んでいませんし、サムライつて彼も山小屋を持つているようですがあそこに住んでいるのではなく、ただの休憩所のようですし。

私は家があるから禁止になつてほしくないですが、ここ最近怪我人も少なくないですし対処してもらつたほうがいいのでしょうか、少なくとも1年は帰らないのですし。

考え方をしていながら他の子達も帰つてきました… ポケモンを銜えて。

連れてこられたポケモンはピカチュウが2匹・コイル・レアコイル・メタモン・ポリゴン・ダンバルの7匹

リカお姉ちゃんはかみなりの石を出して氣絶したピカチュウに当たって、

ライチュウに進化させます。

7匹をボールに入れるとライチュウ以外が転位されました。

リカお姉ちゃんはイーブイが少し傷ついているのを見つけキズぐすりを取り出しますが私が待ったをかけます。

「IJのぐらこの怪我だつたら」

そつ言つて、私はイーブイの傷口に手をかざします。

イーブイのキズが薄く発光して傷が治ります。

私が笑顔で振り向くと、リカお姉ちゃんが驚いた顔をしていました。

リカお姉ちゃんは真剣な表情でこの力を人前でなるべく使わないよう、使ってもばれない様に使うように言います。

リカお姉ちゃんは気にしないようですが、世界中には二三二三特別な力を気味悪がる人も多くいるそうです。

リカお姉ちゃんも特殊な力を持つていて、タマムシに居た頃怖がられたことがあるそうです。

私はリカお姉ちゃんとなるべく使わないように約束します。

ミハルお姉ちゃんは知っているのか聞くと、知られたときに避けられるかもしれない恐怖で言えないそうです。

その後、ポケモンセンターに帰り、リカお姉ちゃんはライチュウを転送してオーキド博士に連絡を取ると、先ほど転送されたポケモンが暴れて大変だそうです。

これは、閉鎖したほうが良いかもしないですね。

ただでさえ凶暴化したポケモンを前に自分のポケモンを見捨てて逃げるトレーナーもたまに居るのに、何かの間違いで凶暴化したポケモンを捕まえてしまい、手に負えず街中で逃がすなどせれたら目も当てられません。

通信を終え、私たちはポケモンセンターの前でミハルお姉ちゃんの帰りを待ちます。

その後2時間ぐらいで帰ってきたミハルお姉ちゃんとジョーイさんにモンスター・ボールを預け、ポケモンセンターのレストランで夜ご飯を食べます。

まともなご飯なんて何ヶ月ぶりでしょう。

しかもタダ！！

夜ご飯を食べ終わり、「えられた部屋に行きます。

部屋で今日貰つてもらつたパジャマを着て横になります。

こんなふかふかのベッドで寝るのも久しぶりです。

私はこんな幸せを味わっていいのでしょうか？

ベッドで横になつていると両親の生きていた頃を思い出します。

3年たつた今でも覚えています。

こんなふかふかのベッドでお母さんに抱かれながら寝たあの日のことを……

2人はもつ寝てしまつたようで、私は2人を起こさないよつてベッドから起き上がりります。

「眠れないの？」

不意に聞こえた声に心臓が飛び上りそうになります。

「起」しちゃいましたか？」

「起きてただけだから大丈夫」

「そうですか」

「それで、眠れないの？」

「はい、昔のことを思って泣いてしまった」

「おこで」

私はミハルお姉ちゃんを起しきなつに静かにリカお姉ちゃんの元に向かいます。

リカお姉ちゃんは掛け布団をまく

「一緒に寝ましょ」

と言つてくれました。

私がベッドに入ると優しく抱きしめ頭を撫でてくれました。

自然に零れる私の涙を何も言わずに受け止めてくれました。

そのまま私は眠つてしまい、気が付いたら朝になつてしました。

天国のお父さん・お母さん、私は今幸せです。

Side out

## 第9話 ミハル、2つ目のバッヂとフシギダネ

Side ミハル

私は朝日が覚めると、ベッドを出てお姉さまの眠るベッドに向かいます。

理由はもちりんベッドに忍び込むためです。

息を潜めベッドに近づくと、イヴちゃんに先を越されました。

私も！と入るうとしてイヴちゃんの顔に涙の後があり、お姉さまのパジャマが濡れているのがわかりました。

イヴちゃんの生き立ちを考えれば、人の温もりに久しぶりに触れて緊張の糸が緩んだのでしょうか。

私は軽くため息を吐き

「またぐ、今日は特別ですわよ」

そう言つて一人の布団を掛け直します。

やる」ともなくなり暇になつてしまつた私は何をしようか考え、とりあえず着替えることにします。

それから部屋を出て外をぶらつかながら今田のジム戦について考えます。

「ジム、指タイプを中心とするジムで試合は2対2の勝ち抜き戦私のメンバーはヒトドリマンは決まりとしても1体を何にするか相性で考えてマンキー、でも昨日進化したリザードとヒドリーナも実戦で使ってみたいですし。

迷いますわ、リザードヒドリーナもいわタイプと相性のいい技を覚えていますが、リザードはいわとじめんヒドリーナはじめんの技を使われたら効果抜群ですし……考へても埒が明きませんわ。

とりあえずお姉さんたちを起こして朝ご飯を食べてしまいましょう。お腹がいっぱいになつたら何か思ひつくかもしれませんし

私が部屋に着くと一人はもう起きていて着替えも終わっていました。私たちは朝食を取り、受付でジョーイさんからイヴちゃんのモンスター ボールを受け取ります。

新品同然になつて帰ってきたモンスター ボールにイヴちゃんはトンターの裏に行きます。

その後、イヴちゃんのポケモンはドービーとピカチュウ。

「いや、やんばトルが苦手であるやうにそんなのでノベルはそこまで高くなっちゃつです。」

「いや、んは」「ノントラスト向きかもしれませんね。」

「そろそろジム戦の時間になるためジムに向かいます。」

「よく来たな！私がジムリーダー代理のムナーだ！」

「ジムリーダー代理？本物のジムリーダーはどうしたんですの？」

「ジムリーダーの我が息子タケシは世界一のポケモンブリーダーになるべく、昨日サトシくんと共に旅に出たため留守だ！」

「旅立ったところ」とはサトシはバッヂは手に入れられたのか

「それでどうやらからジム戦をするんだい？」

「私から行かせていただきますわ」

「昨日聞いてわかつてていると思つがもう一度確認をしようバトル形式は2対2の勝ち抜き戦だ」

「わかつてこますわ」

「それではジムリーダー代理ムナー対チャレンジャー・マサラタウンのミハルのジム戦を開始します。」

先攻はチャレンジャーから!試合!開始!」

「頑張つて!マンキー!」

そつ、私はマンキーに決めました。

「いけ! オムナイト!」

オ、オムナイト! ? 危なかつたですわ、もしザードを出していたら確実にせられていきましたわ。

「マンキー、からでチョップ!」

「オムナイト! みずでつめ!」

「避けて！攻撃続行ですわ！」

「オムナイト！からでこもる」

からでこもったオムナイトを攻撃してマンキーは痛めつけている。

「マンキー、ちきゅうなげ」

マンキーはオムナイトの殻を両手で持つてジャンプし、空中で一回転をしてフィールドにたたきつけました。

土煙が晴れると、オムナイトは殻から出て皿を回していく。

「オムナイト、戦闘不能マンキーの勝ち」

「なかなかやるな！次はどうかな？」

「いけ！サイホーン

つのでつべ攻撃！」

サイホーンはマンキーに向かって突っ込んできました。

「マンキー、ジャンプしてからでチョップ」

マンキーは指示通り、ジャンプをしてサイホーンの頭上を取り、からでチョップを叩き込み戦闘不能にしました。

「サイホーン戦闘不能マンキーの勝利!…よつて勝者マサラタウンのミハル」

「おめでとう!…これが」「ジム公認トレーナーに渡されるグレーバツチだ」

「ありがとうございますわ」

「それで次はリカ君だつたかな」

「よろしくお願いします」

「それではジムリーダー代理ムナー対チャレンジャー・マサラタウンのリカのジム戦を開始します。

先攻はチャレンジャーから!…試合!…開始!…

「シャワーズ！-S e t u p\_

「いけー、ゴローン」

バツチ2つ目でもう進化形が出るんですの！？

私は運がよかつたのでしょう。

お姉さまは大丈夫でしょうか？

「シャワーズ、みずのはづ」

シャワーズの前に水の球体が出来上がり、打ち出されます。

「ゴローン、戦闘不能シャワーズの勝利」

「ならば次だ！いけ！カブト」

「シャワーズ、戻つて！お疲れ様！リーフィア！-S e t u p\_

お姉さまはシャワーズを引っ込め、リーフィアを出しました。

勝ち抜き戦では引っ込めてしまったポケモンを再び使用出来ません。

出来るのは交代を認めた変則ルールのみ、相性が良いとはいえる  
フィアが負ければお姉さまの負け。

お姉さまは出す順番を間違えてしまつたようだ。

「マジカルリー」

お姉さまがそつまつと、リーフィアの周りに多くの葉っぱが出現します。

その葉っぱは、カブトの周りを囲み逃げ場を封じて襲い掛かります。

「カブト戦闘不能リー」フィアの勝利!よつて勝者マサラタウンのリ  
カ」

「おめでとう!これがグレーバッチだ!」

「あつがとうござます」

お姉さまはそつまつてバッチを受け取ります。

私たちはジムを後にし、ハナダシティに向かうためおつきみ山を田指します。

今日のジム戦では私のポケモンもお姉さまのポケモンもダメージを受けていないのでポケモンセンターによらずに向かいいます。

おつきみ山に向かう途中、私たちは怪我をしたフシギダネを見つきました。

急いでポケモンセンターに連れて行つて治療しなくては危険ですわ。

ここまで傷ついているとポケモンセンターが遠いなともかく、近いならキズぐすりの様な下手な治癒薬を使用している時間も惜しく、それよりもポケモンセンターで治療したほうが助かる確率が高いです。

お姉さまの勧めで私はモンスターボールにフシギダネを入れます。

モンスターボールには氣休め程度ですが治癒機能を備えており、怪我の進行を遅らせる効果があるそうです。

モンスターボールをイヴちゃんに預け、イヴちゃんがドードーに乗つて全速力で麓のポケモンセンターに連れて行つてくれるそうです。私たちも後から走つて追いかけます。

ポケモンセンターの入り口ではイヴちゃんが待つており、フシギダネも問題なく助かるそうです。

イヴちゃんがジョーイさんに聞いた話だと、あのフシギダネのトレーナーは二ビジムでバッチを貰つたことでテングになり、この辺に来るトレーナに勝負を挑んでいたのだそうです。

でも、この辺に来るトレーナーは彼と同じくバッチを持つトレーナーばかり、慢心して勝てるわけもなく惨敗続き、仕舞いには自分のポケモンであるフシギダネに当たりだす始末だそうです。

そんな時、『トイキング売りの親父』が現れて伝説の黄金のトイキングとやらを彼に売ったそうです。

『今は弱いが、すぐに最強のポケモンになる』

『』のあたりよりもおつきみ山を越えた先の水の町ハナダシティの辺りで育てたほうが成長が早い

等と言われ、旅立つたそうです。

傷ついたフシギダネを放置して…そんなトレーナーのことなどひとつでもいいとして、フシギダネが目を覚ますのは明日になるだろうとの事で、私たちも今日のところに泊まることにしました。

緊急事態のなり行きとはい、私がおやになつた以上私が面倒を見るべきと、個室でフシギダネの看病を徹夜しました。

お姉さまとイヴちゃんも付き添つてくれていたのですが、ソファーでいつの間にか寝てしまつていました。

二人に毛布をかけ、看病を続けます。

明け方近くになり、いつの間にか寝てしまつたらしく目を覚ますとお姉さまとイヴちゃんにかけた毛布を私は肩にかけていて、お姉さんたちは私の代わりに看病をしてくれていました。

フシギダネも意識を取り戻しており、だいぶ元気になつていきました。フシギダネも懐いてくれて、一緒に旅をするか聞くと頷いたので一緒に旅することになりました。

Side out

## 第10話 ミハル、ゴールデンブリッジ シゲル再び

Side ≡ハル

おつきみ山を出で、私たちはハナダシティにたどり着きました。

え？ おつきみ山はどうしたのですって？

特筆すべきことがないので省略します。

しいて上げるとするなら、私とお姉さまはそれぞれ、イシツブテ・パラス・パラセクト・ピッピ・ピクシー・ゴルバットを捕まえ、それプラス私がズバットを捕まえオニスズメがオニドリルに、フシギダネがフシギソウに進化した事、私が月の石を拾つたことくらいですわ。

私たちはまずジムで登録を済ませに行きます。

ジム戦は明日の朝1番には出来るそのので予約をし、ポケモンセンターで宿の登録をします。

その後、私たちは「ゴールデンブリッジを越えた先にある湖に向かいます。

その湖はハナダシティでは有名なテートースポットで、とても綺麗な場所だそうです。

ゴールデンブリッジを渡ろうとするとき、向こうからシゲルがやってき

ました。

「2人とも久しぶりだねえ。

おや？ そつちのレーティは誰だい？」

「初めまして、イヴといいます」

「ボクの名前はシゲルだ、じゅうじゅうじく

「よろしくお願いします」

「それで、トレーナー同士が顔を合わせたんだ。ポケモンバトルとい  
こひじやないか」

「私たちはこれから湖に行くのでお断りしますわ」

「湖はしばらく立ち入り禁止だそうだ。」

ボクもさつき行つて追い返された。

「何でもドラマの撮影をやつているんだとか…」

「やつこつ」となり……時間つぶしにもなりますし

それで、どうひとりバトルするんですの？」

「こずれ勝つつもりだが、今のボクではリカ君に勝つのは無理だからね

当然ミハル君、君だ」

「己の部を弁えているのはいいですが、言つてこる」とは格好悪いですわよ」

「ほつといてくれないかい……それで、受けるのかい？受けないのかい？」

「受けますわ」

「なら勝負は3対3全滅したほうが負けだ」

「わかりましたわ

審判はお姉さまがやつてくれるそういうのですわ。

「これよりポケモンバトルを開始する。

使用ポケモンは3体どちらかが全滅したほうが負けとする。

ポケモンの交代はなしとする。

試合開始！

「頑張つて！オニードリル」

「行け！ピジョン」

私、空中戦は初めてですわ。

「オニードリル！エアカッター」

「ピジョンーかぜお！」

オニードリルのエアカッターをピジョンはかぜお！じで軌道をずらします。

「ならば、ピジョン！でん！」うせつか

「それなら、つばめがえし」

オニドリルとピジョンが空中で交差する。

それから何度も空中でオニドリルのつばめがえしとピジョンのでん  
いうせつかがぶつかり合った。

結果ピジョンは戦闘不能、オニドリルは何とか勝つことが出来た。

「ピジョン、戦闘不能」

「戻れ！ピジョン

次だ！行け！カメール！

カメール、みずでっぽつ」

先ほどの戦いで、オニドリルの体力はほとんどなく、一撃で戦闘不能になつた。

「オニドリル、戦闘不能」

「戻つて！オーディル！お疲れ様

お願い、フシギソウ」

「フシギソウだつて…＝ハル！君の選んだポケモンはヒトカゲではなかつたか！？シンジと交換したのか？」

「違いますわ、この子がまだフシギダネだつた頃に＝ゼシティからおつきみ山に行く途中で傷付いてたのを保護して、そのご縁で一緒に旅することになつたのですわ」

「ああ、あの時のフシギダネか」

「知つているんですね？」

「ああ、＝ゼジムからおつきみ山に行く途中、フシギダネ1体でジムで勝つたとテングになつたトレーナーとバトルしたんだ。

フシギダネはそこそこ強かつたがトレーナーが駄目で楽に勝てたのを覚えてる。

そのトレーナーとれつも湖の近くであつてリベンジを挑まれた。

なんか伝説の黄金のコイキングを手に入れたとか何とか言つてたな。

それから金ぴかのモンスター・ボールから同じく金ぴかのコイキングを出して最強のポケモンがどうとか…

結局、バトルは瞬殺バトルが終わる頃にはコイキングの体もメリキみたいで所々剥がれてたな。

それで、あの時のフシギダネはどうしたのか聞いたら、捨てたとかふざけた事を言つていたな

今ならまだ湖の辺りでコイキングを鍛えているんじゃないかな?

「フシギソウ、会いたい?」

私がフシギソウに聞くとフシギソウはフルフルと首を横に振つて拒否します。

「お姉さま、イヅちゃん……その」

「別にいいわよ、ビリビリも行きたい訳じゃないし」

「私もいいですよ」

「2人とも、ありがとう」

「あ～、話題を振ったボクが言つのもなんだけど、バトルを再開したいんだけど」

「あう、ごめんなさい」

「それじゃあ、試合再開！」

「カメール！あわだ！」

「フシギソウ、はっぱカッター」

カメールのレベルが高いらしく、相性の良いはずのはっぱカッターであわを相殺することしか出来ませんでした。

「フシギソウ、つるのむち」

「カメール！からにこむる」

からにこもつたカメールをフシギソウはつむのむちを何度も叩きつけますがあまりきいていないようです。

「それなら…フシギソウ…カメールを思いつきり上空に放り投げて！」

フシギソウはつむのむちをカメールに撒きつけ、カメールを上空に放り投げます。

「フシギソウ…ソーラービーム…」

「カメール！ソーラービームを出せせるな！ハイドロポンプ…」

上空からカメールのハイドロポンプが迫ってきます。

ハイドロポンプがフシギソウに当たる、その前にソーラービームのチャージが完了しました。

「ソーラービーム、発射！」

フシギソウのソーラービームはハイドロポンプを引き裂いて、上空で避けることの出来ないカメールに当たります。

カメールは戦闘不能になつて落下しました。

「カメール、戦闘不能」

「戻れ！ カメール！ よく頑張つたな。

」の勝負ボクの負けだが最後まで粘らせてもらひつよー。

行け！ ロラッタ

ロラッタ、でんごうせつからひつせつまえば

ロラッタが凄い勢いで迫つてきます。

……まだ！ まだ引き付けて……今！

「今ですわ！ はつぱカッター」

ロラッタは回避も間に合わず葉っぱの波に飲まれて戦闘不能になりました。

「ロラッタ戦闘不能、ミハルの勝利」

「戻れ！ フラッタ

今回は完敗だが次は勝たせてもうひつよ

そう言ってシゲルは去っていきました。

湖行きが中止になつたので、私たちはポケモンセンターでのんびりすることにしました。

次の日朝一番にジムに向かう途中、近くの店で昨夜盗難事件があつたというのが聞こえました。

Side out

**地震の問題が一段落するまで凍結のお知らせ**

タイトルの通りです。

3月の地震が起きてから、ポケモンの技にじしんやだくじゅうがあるため、落ち着くまで自主凍結していたこの作品ですが、

最近また地震が多くなつてきましたので、この度正式に凍結することに決定いたしました。

今作品の更新を楽しみにしていた皆さん誠に申し訳ありません。

今まで、ありがとうございました。

状況が落ち着きしだい、また更新を再開させていただきます。

それでは、「縁がありましたらまたお会いしましょう」。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1802q/>

---

ブイ系と共に

2011年9月8日10時24分発行